

令和 3 年 6 月 9 日現在

機関番号：11501

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2020

課題番号：19K23036

研究課題名（和文）室町期における連歌表現と和歌表現の交錯・連環

研究課題名（英文）The Interaction Between Renga Expressions and Waka Expressions in the Muromachi Period

研究代表者

生田 慶穂（Ikuta, Yoshiho）

山形大学・人文社会科学部・准教授

研究者番号：00846230

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、室町時代の連歌表現と和歌表現がどのように影響し合ったか明らかにすることであった。歌人正徹の和歌表現と正徹前後の連歌表現との関係を調査した結果、正徹は連歌表現を和歌に積極的に取り入れ、さらに連歌表現をヒントに新たな和歌表現を創り出したことがわかった。また、そのような正徹の和歌表現は連歌師たちによって連歌に取り入れられ、連歌表現として定着していくことが確かめられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで正徹の和歌が連歌に影響を与えた点が注目されてきたが、本研究では連歌の影響によって正徹の独特な和歌表現が生まれた可能性を指摘した。本研究の学術的意義および社会的意義は、「和歌から連歌へ」という流れだけでなく「連歌から和歌へ」という流れも重視し、連歌と和歌が同時代の文芸として相互に影響を与え合ったことを、実例を示しながら具体的に描き出したことにある。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research was to find how renga and waka expressions influenced each other in the Muromachi period. I examined the relation between Shotetsu's waka expressions and other poets' renga expressions around that time and found that Shotetsu proactively introduced renga expressions into his waka poems. He also created some original waka phrases based on existing renga expressions. Some of those phrases were then reintroduced into renga by renga poets and eventually became standard renga expressions.

研究分野：日本中世文学 連歌

キーワード：連歌 和歌 正徹

## 1. 研究開始当初の背景

日本詩歌の歴史は、和歌から連歌へ、連歌から俳諧・俳句へ、と単純に図式化して語られる傾向があるが、室町時代は連歌と和歌が共存した時代である。実際に、連歌師は和歌を詠み、歌人もまた連歌を詠んだ。連歌と和歌の双方をたしなむ武将もめずらしくなかった。こうした状況から、連歌と和歌は、同時代の文学として相互に影響を与え合っていたと想定される。しかし、連歌表現と和歌表現が具体的にどのように関わってきたか、その過程と実態はまだ十分に明らかにされていない。

先学によって、15世紀以降の状況については整理が進められつつある。松本麻子「歌連歌と連歌歌 正徹の和歌を軸に」(『中世文学』58号、2013年)は、島津忠夫が「宗祇連歌の表現」(『島津忠夫著作集 第三巻』、2003年、初出1955年)で「連歌的表現」と評したものは、実は歌人・正徹(1381-1459)の家集『草根集』にみえる独特な表現を、連歌師・歌人の双方が取り入れた結果である、と指摘した。ところが、ごく最近、廣木一人によって、正徹が参加する連歌懐紙が紹介された(「正徹句を含む「応永廿三年二月廿三日『賦何人連歌』」について」、中世文学会春季大会、2018年6月)。この発見は、正徹の新しい和歌表現が連歌・和歌に取り入れられたとする松本の説に対して、連歌表現の影響を受けて正徹の和歌表現が生み出された可能性を示唆する。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、室町期の連歌表現と和歌表現がどのように影響し合ったか、明らかにすることである。特に、二条良基・救済の連歌に注目し、それらが正徹ら室町歌人にどのように受け入れられたか詳らかにする。

## 3. 研究の方法

良基・救済の連歌表現が、和歌表現にどのような形で取り入れられていたか調査する。調査対象は、『文和千句』(1355か)、『紫野千句』(1357~1370)、『石山百韻』(1385)、京都女子大学図書館蔵『賦何路百韻』(年次未詳)および『菟玖波集』(1356)収載の良基句87句と救済句126句とする。まず、対象作品の措辞を原則として句単位に分解し、古典ライブラリー提供「和歌&俳諧ライブラリー」、連歌用例検索システム「Keiko4」、『連歌大観』索引を用いて、和歌・連歌の用例を調査する。次に、連歌例が和歌例に先行するケースを抽出し、特定の歌集・歌人にこうした措辞の集中があるか分析する。連歌からの影響を受けやすい歌人層として冷泉派が想定されるため、冷泉為秀・今川了俊・冷泉為尹・正徹ら冷泉派歌人の系譜と連歌との接点を検証する。

代表的な堂上連歌作者かつ二条派歌人であった二条良基の連歌表現と和歌表現を比較し、その差異の検討をとおして、「連歌的」とはどういうことか実作に即して明らかにする。良基は、一時京極派の歌風を試みるも、最終的には保守的な二条派の歌風を堅持した人物である。良基の連歌表現と和歌表現を差異化する意識について考察する。

中止(代わりに「みだれご」という措辞の分析を行った)

### 研究計画の変更について

当初、2019~2020年度について上記の計画を立てていたが、2020年度に研究機関の異動とコロナ禍が重なり、研究活動に大きな影響があった。そのため、は部分的に遂行、は中止し、その代わりに「みだれご」という措辞の分析を集中的に行うことにした。

## 4. 研究成果

『石山百韻』『文和千句』の措辞について調査した結果、正徹の和歌に積極的に連歌表現が取り入れられていたことが判明した(「松一木」「水の鶏」「月の夕暮」など)。また正徹の師である冷泉為尹の和歌にも連歌表現を取り入れたものが複数見つかった(「手枕の月」「谷の水音」「草のかり庵」など)。中世歌人の多くは連歌にも興じており、和歌と連歌とで言葉や表現を使い分けていたと指摘されているが、少なくとも冷泉派歌人においては連歌表現を意識的に摂取した可能性が高い。当時の歌壇と歌風を捉える上で重要なデータである。

正徹『草根集』に見える「みだれご」という特異な語(和歌・連歌における初例)に注目し、後代の和歌・連歌の用例を調べると、まず連歌で盛んに用いられ、のちに和歌にも用いられるようになったことが分かった。歌人と連歌師の接触によって新たな歌語が生み出された過程として注目される。なお、「みだれご」は「乱碁」の訓読語と考えられるが、和歌・連歌における「みだれご」は内容として困碁を指す場合がほとんどで、ボードゲーム「らんご」(または「らご」)を指すことは稀である。「みだれご」に困碁の意味があることは主要な大辞典に記されていない。本件は語史にも資する成果といえる。

実態不明とされているボードゲーム「らんご」(または「らご」)を、『槐記』に基づき盤上で

復元した。『槐記』の享保 17 年 10 月 18 日条は「らんご」について次のように記す。

先石ノ白黒ヲーツニマゼテ、碁盤ノ目ヲ四方ニヒトメノコシテ、ヒシト並ベテ四方ノ角ニ、白石ニツ、黒石ニツ、已上四ツヲ置テ是ヲメヤストス、初人五人カ七人カ並テ、ソノ石ヲ、目ニ從テ横ニ走リテ、タトヘバ白石ナレバ、白石ノ縦ニ多クナラビタル處マデ、縦ノ白石ノツヅキタル石ダケヲトル也、又黒石ナレバソノ次ニ横ニ走リテ、縦ニ黒石ノツヅキタルダケヲトル也、ソレハ一度ハ白石、一度ハ黒石ヲツカフ也、人ガ五人カ七人カナレバ、同ジ人ガ一度ハ白、一度ハ黒ヲツカフニナリテヨシ、サナケレバ同ジ石ニアリテハ兼テアシ、カヤウニシテトリドリシテユケバ、後ニハ皆ニナル也

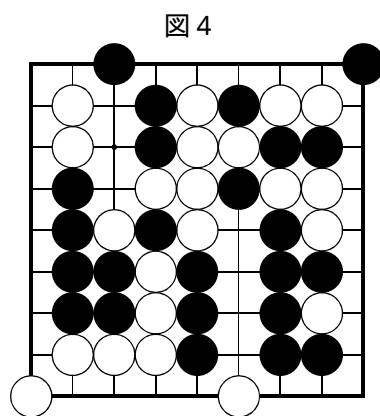
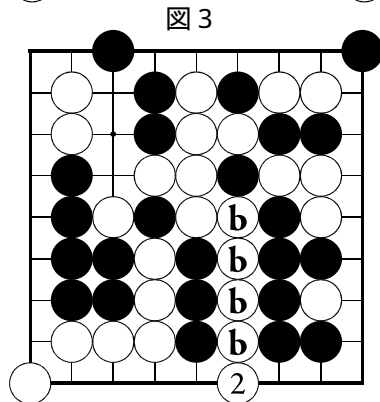
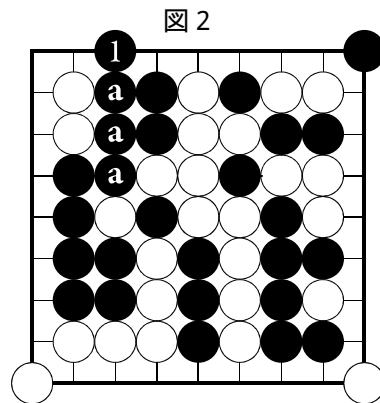
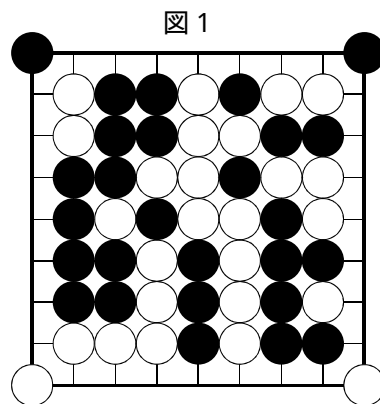
(引用は『史料大観』により濁点を補った。)

端的に言えば、プレイヤーが順番に白石と黒石を交互に動かかし、盤上から石を取り上げていくゲームである。標準的な碁盤の仕様は 19 路 (19×19) であるが、ここでは便宜上、小型の 9 路盤を用いて説明する。

図 1 は、ゲーム開始時の配置を再現したものである。プレイヤー 1 が左上隅の黒石を ①まで横に移動させると (図 2)、縦に並んだ黒石 3 個 (a) を盤上から取り上げることができる。次に、プレイヤー 2 が右下隅の白石を ②まで横に移動させると (図 3)、縦に並んだ白石 4 個 (b) を盤上から取り上げることができる (図 4)。盤上から石が無くなるまで上述の流れを繰り返す (角に置いた 4 個は除くか)。『言継卿記』の記述によれば勝敗があり、恐らく石を最も多く取ったものが勝者となったのであろう。

深い読みが要求される囲碁と違って石の動きは単純であり、勝敗は運に左右される。「らんご」は、貝合わせなど幼児の遊びとともに羅列されることがあり、酒宴の余興として開催された例もある。年齢を問わず、多人数が同時に遊べる気軽なボードゲームであつたらしい。

研究成果を 2020 年度内に発表することができなかった。2021～2022 年度にかけて順次論文化する予定である。



5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

|  | 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号) | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号) | 備考 |
|--|---------------------------|-----------------------|----|
|--|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|